

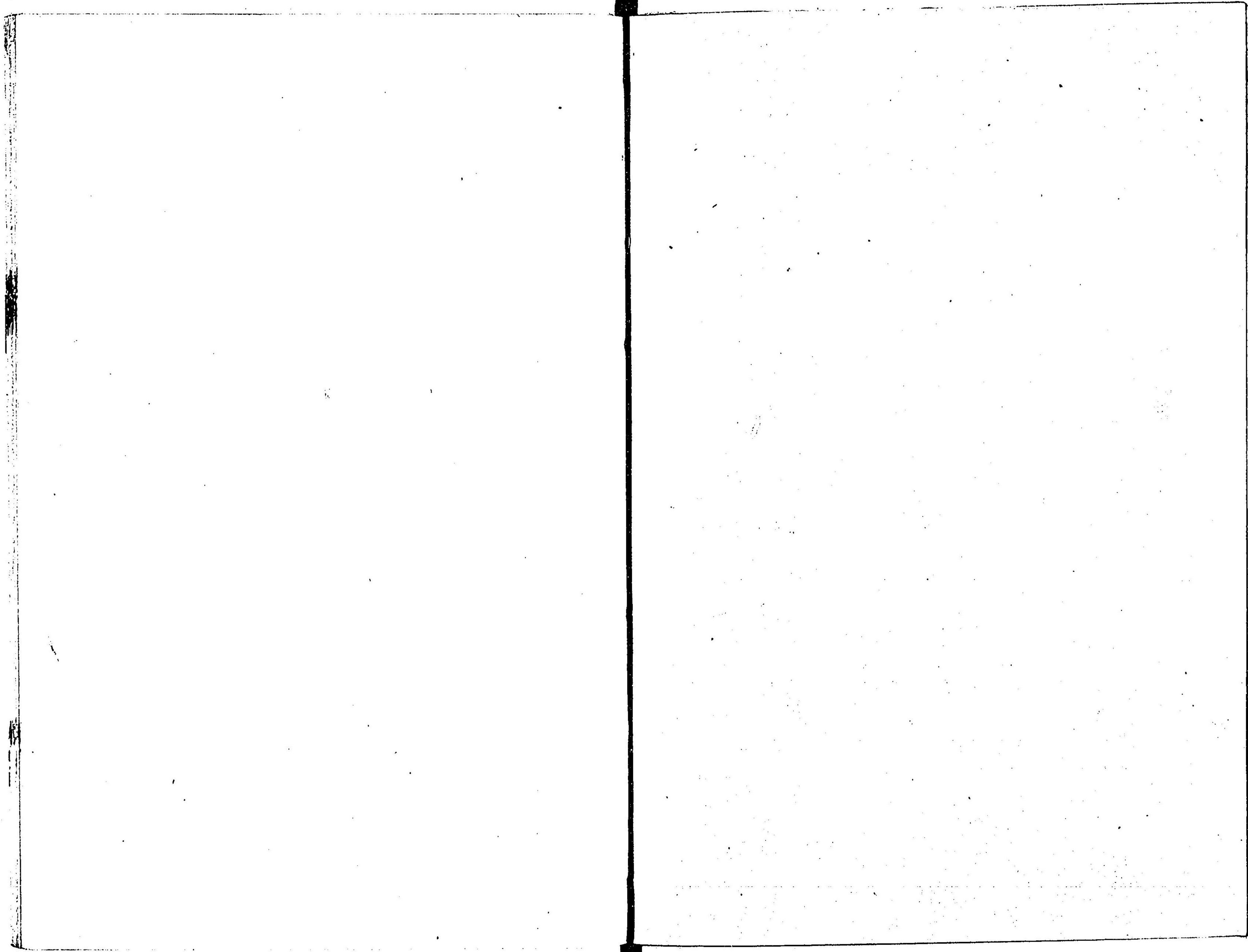
特+2

446

訂  
觀  
流  
徂  
内  
百  
珍  
香

玉  
斗  
景  
清  
杜  
若  
二人  
静  
安  
達  
原

九





一、<sup>上考</sup> 針の先を

實に同様にし、針の先を

針の先を

針の先を

針の先を

針の先を

針の先を

<sup>上考</sup> 針の先を

針の先を

針の先を

針の先を

<sup>下考</sup> 針の先を

針の先を

針の先を

了。前々此の世に於て此井の産程を

考ふるに此井の産程を考ふるに

此の世に於て此井の産程を考ふるに

考ふるに此井の産程を考ふるに

考ふるに此井の産程を考ふるに

考ふるに此井の産程を考ふるに

考ふるに此井の産程を考ふるに

考ふるに此井の産程を考ふるに

考ふるに此井の産程を考ふるに

考ふるに此井の産程を考ふるに

考ふるに此井の産程を考ふるに

考ふるに此井の産程を考ふるに

考ふるに此井の産程を考ふるに

考ふるに此井の産程を考ふるに

あつては桂の葉の影にまぎれて  
隠るゝ人<sup>ト女</sup>の影も  
あつては桂の葉の影にまぎれて  
隠るゝ人<sup>ト女</sup>の影も  
あつては桂の葉の影にまぎれて  
隠るゝ人<sup>ト女</sup>の影も  
あつては桂の葉の影にまぎれて  
隠るゝ人<sup>ト女</sup>の影も  
あつては桂の葉の影にまぎれて  
隠るゝ人<sup>ト女</sup>の影も

あつては桂の葉の影にまぎれて  
隠るゝ人<sup>ト女</sup>の影も  
あつては桂の葉の影にまぎれて  
隠るゝ人<sup>ト女</sup>の影も  
あつては桂の葉の影にまぎれて  
隠るゝ人<sup>ト女</sup>の影も  
あつては桂の葉の影にまぎれて  
隠るゝ人<sup>ト女</sup>の影も  
あつては桂の葉の影にまぎれて  
隠るゝ人<sup>ト女</sup>の影も  
あつては桂の葉の影にまぎれて  
隠るゝ人<sup>ト女</sup>の影も









の外祖ハナハハありて其姫もたふありぬ  
 深う明し日月ツキヒをゆく一年トシに  
 珍ウツクシくしゆゆな成ぬまは秋  
 國よりくつりのし海路ウミヂのしる人  
 ちあふしナカあふしナカあふしナカ  
 中ナカ中ナカ中ナカ  
 ありアリありアリありアリ  
 ありアリありアリありアリ

てさあつちをタマシ送つ事ツキあら  
 其コノ道ミチ禁カガムむ事ツキあら  
 塩シホより玉タマあつちをタマシ送つ事ツキ  
アリありアリありアリありアリありアリありアリ  
 娘玉メグより人ヒトの娘官メグ金銀カネのしる  
 玉タマよりあつちをタマシ送つ事ツキ  
 侍サマよりあつちをタマシ送つ事ツキ



三三  
 枝よしめりてしるの葉もたぐ  
 上  
 まくしとむあつちかへ葉もつ二人  
 の姫よ玉とまむ龍王たるらる  
 遠きそら風しほまきまてりよ  
 夢しりまきまの葉もしるはて  
 龍言よりしるはてまむ

景清

染  
 消ぬたよりものあはれつ露の  
 身がやよめぬと 是も鎌倉龜  
 ほう谷よ人丸とや女もていふはくも  
 我父悪七兵衛景清へ平家の味方  
 たるよより海軍よめくまれ日向の國  
 宮崎しるはて流るる年月を

雲の影をうけて  
 影の影をうけて  
 おうまも様もあはれま  
 とうまも様もあはれま  
 草のまろく露をうけて  
 秋うれ相模をうけて  
 舟のまろく浪をうけて  
 舟のまろく浪をうけて

舟のまろく浪をうけて  
 舟のまろく浪をうけて  
 舟のまろく浪をうけて  
 舟のまろく浪をうけて

舟のまろく浪をうけて  
 舟のまろく浪をうけて  
 舟のまろく浪をうけて  
 舟のまろく浪をうけて

ふも雲暖よあはれはるるにき

こゝも雲入るる中は春のなり

ふ雲よさうさくぞ入るまきのあは

まやあつ果たるる様は我たよ

しりあつとさうあつて構を

のしりあつとさうあつて構を

あつとさうあつて構を

あつとさうあつて構を

あつとさうあつて構を

あつとさうあつて構を

あつとさうあつて構を

あつとさうあつて構を

あつとさうあつて構を

まゝ上モ河まゝ上モ河まゝ上モ河まゝ上モ河

と上モ河と上モ河と上モ河と上モ河

人の上モ河人の上モ河人の上モ河人の上モ河

ても上モ河ても上モ河ても上モ河ても上モ河

家ノ侍悪七兵衛景清や戸休

実上モ河実上モ河実上モ河実上モ河

首目上モ河首目上モ河首目上モ河首目上モ河

き上モ河き上モ河き上モ河き上モ河

信上モ河信上モ河信上モ河信上モ河

尋上モ河尋上モ河尋上モ河尋上モ河

き上モ河き上モ河き上モ河き上モ河

の上モ河の上モ河の上モ河の上モ河

者上モ河者上モ河者上モ河者上モ河

子上モ河子上モ河子上モ河子上モ河

子上モ河子上モ河子上モ河子上モ河

せん遊女を遊ばし人々をばし  
 女子あはれ行のわなきり思  
 鍾入者かちうえうちつり長よ預き直  
 かあれ親子とせり父よ向つて言  
 紫とちうり書  
 ぬ首目りしあまきりて心独  
 孝く親のまらあれく  
 此

あらまらんと人の徳り分  
 付の徳用せり多  
 急也沙衣の流ら入りても  
 なる程成人と書き  
 依悪七兵衛景清と書ける  
 此方へ出たは此處まで  
 此方へ出たは此處まで  
 此方へ出たは此處まで



あつて食事をしませぬと書かす

乞食より出た者も景清の勢に

まも景清の心よりしてゐる

志まはさぬ侍格傷のま

多しとて付とた事事

はそ<sup>て</sup>侍不審をて

しつて人景清の御

と一度いハハは對面をた

まはさぬとて下向して

おの事おの事おの事

て景清の心よりして

言語通ぬ侍格景清の

は心よりしてゐる

景清の御心を

おもひ懸きとちりし。目<sup>め</sup>の<sup>の</sup>勾當<sup>こうどう</sup>と名  
 ぞしむるはひらつらとを様入とたれ  
 我<sup>われ</sup>の<sup>の</sup>者<sup>もの</sup>の<sup>の</sup>憐<sup>れん</sup>をきしと  
 命<sup>いのち</sup>は<sup>は</sup>し<sup>し</sup>ひ<sup>ひ</sup>の<sup>の</sup>青<sup>あお</sup>より<sup>より</sup>く<sup>く</sup>る<sup>る</sup>海<sup>うみ</sup>の<sup>の</sup>様<sup>よう</sup>  
 を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>し<sup>し</sup>は<sup>は</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>は<sup>は</sup>な<sup>な</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>と<sup>と</sup>お<sup>お</sup>も<sup>も</sup>  
 して<sup>して</sup>は<sup>は</sup>某<sup>たれ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>。皇<sup>み</sup>の<sup>の</sup>言<sup>こと</sup>を<sup>を</sup>平<sup>へい</sup>人<sup>びと</sup>  
 一<sup>ひと</sup>我<sup>われ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>。一<sup>ひと</sup>其<sup>その</sup>母<sup>はは</sup>は<sup>は</sup>對<sup>たい</sup>面<sup>めん</sup>

ち<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>昔<sup>むかし</sup>の<sup>の</sup>今<sup>いま</sup>の<sup>の</sup>ほ<sup>ほ</sup>の<sup>の</sup>昔<sup>むかし</sup>の<sup>の</sup>今<sup>いま</sup>の<sup>の</sup>ほ<sup>ほ</sup>  
 お<sup>お</sup>も<sup>も</sup>く<sup>く</sup>事<sup>こと</sup>の<sup>の</sup>ち<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>言<sup>こと</sup>を<sup>を</sup>平<sup>へい</sup>人<sup>びと</sup>  
 傳<sup>つた</sup>へ<sup>へ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>。一<sup>ひと</sup>其<sup>その</sup>母<sup>はは</sup>は<sup>は</sup>對<sup>たい</sup>面<sup>めん</sup>  
 たる<sup>たる</sup>故<sup>ゆゑ</sup>郷<sup>きやう</sup>の<sup>の</sup>者<sup>もの</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>。一<sup>ひと</sup>其<sup>その</sup>母<sup>はは</sup>は<sup>は</sup>對<sup>たい</sup>面<sup>めん</sup>  
 あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>。一<sup>ひと</sup>其<sup>その</sup>母<sup>はは</sup>は<sup>は</sup>對<sup>たい</sup>面<sup>めん</sup>  
 平<sup>へい</sup>行<sup>ぎやう</sup>の<sup>の</sup>悲<sup>かな</sup>涙<sup>なみだ</sup>たる<sup>たる</sup>。一<sup>ひと</sup>其<sup>その</sup>母<sup>はは</sup>は<sup>は</sup>對<sup>たい</sup>面<sup>めん</sup>  
 一<sup>ひと</sup>其<sup>その</sup>母<sup>はは</sup>は<sup>は</sup>對<sup>たい</sup>面<sup>めん</sup>

しんがくへんじきせいのぎやう

切なる念を以て其の書

とてしるべし

執名は此國の

邦に向ひたる名を以て給てカ

あはれし

名の書

らも

あはれ

よ

か

よ

書

く

知... 雲... 花... の... ぼ... の... 尊...  
 神... 備... 浦... の... 後... の...  
 浪... の... 文... 壇... の... 後...  
 其... も... 平家... の... 語...  
 女... の... 是... の... 事...  
 一... の... 女... の...  
 一... の... 女... の...

早...  
 一... の... 前... の... 景清...  
 一... の... の... 事...  
 一... の... の... 事...  
 一... の... の... 事...  
 一... の... の... 事...  
 一... の... の... 事...  
 一... の... の... 事...

まへは借し〜

対面タビのあしタビ〜

美し〜

かゝる露た〜

けし〜

あは慈あ〜

今ア〜

き〜

や〜

鈴すず〜

と思おも〜

思おも〜

〜

ひよ〜



くたはるに陣たるはくきとてたつるは  
一箇もよひてしよきとてつとて作  
へしお語とて彼者とて古錦  
をうへて鈴の作へしとて津物  
かたつとてつとてつとてつと  
あぐへしとて其はとて青水三年三  
月下のつとてつとてつとてつと

を陸兩陣と海岸よりつとてつと勝  
とてつとてつとてつとてつと  
たまたまつとてつとてつとつと山  
中の水邊のつとてつとつとつと  
もつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつと

おしとるまゝに宣ひ景清

の御書に御書あはせたり

あしとるまゝに命をたてし

あしとるまゝに教経よ家則の御書

これ御書の御書とまゝに

まよひまゝに御書を

おしとるまゝに御書

あしとるまゝに御書

あしとるまゝに御書

あしとるまゝに御書

あしとるまゝに御書

あしとるまゝに御書

あしとるまゝに御書

侍悪七兵衛景清と名あはせ







萬葉集卷之四十一 國郡名

ある國郡は社名といふものありて  
てはたより諫やと思ふる た 多  
陰 た 夏も た 多 た 多 た 多  
あ た 多 た 多 た 多 た 多 た 多  
た た 多 た 多 た 多 た 多 た 多  
社名 た 多 た 多 た 多 た 多 た 多

具沢よりもとむし論 甲 是入諸

國一見入者 甲 社名 甲 自由

詠 甲 社名 甲 行 甲 多 甲 多 甲 多 甲 多

是社 甲 三 甲 國 甲 橋 甲 多 甲 社名 甲 名 甲 可

多 甲 多 甲 多 甲 多 甲 多 甲 多 甲 多 甲 多

名 甲 可 甲 多 甲 多 甲 多 甲 多 甲 多 甲 多 甲 多

多 甲 多 甲 多 甲 多 甲 多 甲 多 甲 多 甲 多





<sup>軍</sup> 蒼々<sup>一</sup>也頓<sup>一</sup>美<sup>一</sup>人<sup>一</sup> <sup>女</sup> 女<sup>一</sup> <sup>軍</sup> 汝冠唐<sup>一</sup> <sup>軍</sup> 汝冠唐<sup>一</sup> <sup>軍</sup> 賄<sup>一</sup> <sup>軍</sup> 良<sup>一</sup> <sup>女</sup> 是<sup>一</sup> <sup>女</sup> 是<sup>一</sup> <sup>女</sup> 是<sup>一</sup> <sup>女</sup> 是<sup>一</sup>

<sup>軍</sup> 形見<sup>一</sup> <sup>軍</sup> 冠<sup>一</sup> <sup>女</sup> 成<sup>一</sup> <sup>女</sup> 植<sup>一</sup> <sup>女</sup> 女<sup>一</sup> <sup>女</sup> 業<sup>一</sup>



下... 行... サ...

あく終りもあ... 昔よりカ冠

きく大さ良の葉... 身の内まよき...

し... かりよかよきり... 仁明天皇の御

か... よらも... 初とうきで...

内... のま震だつち... ぼまの初め...

春... 自の葉の初は... として...

の冠... せり... 君の惠の...

故... 殿よあく... 元服のり... 當尉其例

稀... ある故... ちう... 申さうや

名... 勢... 親母中... の度... 栄... たい...

ど... う... あり... の誠... あり... みる...

ゆ... ぞ... 可... せ... 東... の方...

行... 雲... の... ぎ... ち... の... 毎... ち...

と... み... ぐ... ち... ち... ち... ち...







下段... 蟬の唐衣... 神白ぬのうれ花の  
 雲のおき... 柱若の... 倍りの心用... 國去... 成佛の法...

二人静

早

是ハみり... 野... 是ハみり... 野... 野... 野...

ばさむのさかすかすのさかすか  
 夏のさかすかのさかすかのさかすか  
 松乃城自持のさかすかのさかすか  
 しのさかすかのさかすかのさかすか  
 清のさかすかのさかすかのさかすか  
 少のさかすかのさかすかのさかすか  
 老のさかすかのさかすかのさかすか  
 老のさかすかのさかすかのさかすか

下のさかすかのさかすかのさかすか  
 まのさかすかのさかすかのさかすか  
 山のさかすかのさかすかのさかすか  
 とのさかすかのさかすかのさかすか  
 今のさかすかのさかすかのさかすか  
 今のさかすかのさかすかのさかすか

中略して行はせしむるニテ

野史に社家の人其家の人によ

も言傳へられたるはつらう罪業の

類ありて一日經りて我欲と

ひてたゞい給ふと能く信んニテ 則ち

うろしむるを信んば信んば人

し其まうは名をとり難くカ

テ此由傳へしりて其も難く人

らるる母にりたはるるて其

名をかり名業をニテ其も難く

るる其も難くニテ其も難く

るる其も難くニテ其も難く

るる其も難くニテ其も難く

るる其も難くニテ其も難く



言語清以

少一也助ふれおのれ精氣志て六

りるよ梅らちり人への付る心る

そ名をそ名書は跡をの態よ弟ひ

てまらまらし<sup>に</sup>けららるる

さく<sup>に</sup>判官殿ははりさく意

判官殿ははり人へ多中よおの

衣乃乃清寂期まては供した甲

十郎持取<sup>に</sup>無房の判发ぬは死骸

心静よあたらぬ腹きる焰よきて入

およ義成<sup>に</sup>患乃者はれりれよ入

あき物<sup>に</sup>まらぬ我ハ女あり

此山はは供<sup>に</sup>愛まて捨るれ事

きく絶ぬ思の海乃袖<sup>に</sup>つま





思出乃 時もまゝなり 静

万葉 今より 野の河乃名乃

道つものも思ふよ 行よしとて山

陰のこもたつりま 枝り那 柳も

義経きよしよ 夢のきり 既討手向ふ

とゆつり 舟のふ 五葉わらぬ 柳

晴より 押渡しとき 海路のよ

仁きの 種内 咲てきと 乃地より 平

高 多夫命の 入の 科 首より 一

科 方きり 如く 文を 恨むる ともり 也

名 去程の 次第 くる 備を 公は たりと 成

て 此山より 力き入 狩し 比き 雲 雨の みよ

一 舟乃 花よ 富か ちる あり 柳も 静

か あり ちる 史局よ 程き ちぬ 夢を



花さくしては惜しむ年々  
下 花のあはれをばか  
みよの風よは花の  
下 花のあはれをばか  
奥深く奥く山路の  
下 奥深く奥く山路の  
頼朝よは出づる  
下 頼朝よは出づる  
舞よよまのあはれをばか

下 舞よよまのあはれをばか  
昔の昔の和歌  
下 昔の昔の和歌  
思ふ人よはあはれをばか  
下 思ふ人よはあはれをばか  
花のあはれをばか  
下 花のあはれをばか  
花のあはれをばか  
下 花のあはれをばか







菴半よきむらさきと紫の

序  
はらう思入痛うまよ上書あはれ

留まのふりて靡さるるま

妙抄草もまぬもむらうた

くもまぬもまぬもまぬ

まぬのまぬのまぬのまぬ

まぬのまぬのまぬのまぬ

まぬのまぬのまぬのまぬ

まぬのまぬのまぬのまぬ

まぬのまぬのまぬのまぬ

まぬのまぬのまぬのまぬ

まぬのまぬのまぬのまぬ

まぬのまぬのまぬのまぬ

まぬのまぬのまぬのまぬ

まぬ

まぬ









思百々久 あり嬌やいかに

は發く人お汝も乃完僧もは病く

いあツキ心ツキのツキ 一ツキもあツキれ

園の口をおつ際よりよくみまの膿血

忽融腫し鼻穢ハ満しほしちやく

し膚臆悉爛壞きり人の死骸ハ

投し行とくくつと直り

が中核具き音よかきき息乃黒

塚下よ下も下も下鬼下ハ下も下あり

物上ら上う上ち上お上ち上も上み上ら上つ

乃安傳家の黒塚よ鬼ハも

誒上き上ん上じ上ら上い上も上あ上も上流上と

ら上ろ上も上ま上ま上ら上し上所上を上き上づ上く上ぐ

ま上方上の上ち上ら上ね上た上き上よ上白上き上ん上よ上ま上





お冷くはづい拜ハあをまを  
き夜あしれ喜みたらまきれ  
うまよまりああしるわと  
失よまり

